

第12回「日本語大賞」

テーマ「心にひびいた言葉」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「面白きこともなき世を面白く」

静岡県

静岡大学教育学部附属静岡中学校

一年 金田 匠

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

心にひびいた言葉。それはどんな言葉なのだろうか。この言葉について、自分なりの解釈をしてみることにした。心にひびくというのは、心の底までグツと伝わるということだろう。だから、心にひびいた言葉とは、自分の心に、他の何よりも強く届き、忘れられない言葉である。ぼくは考えた。

「心にひびいた言葉」をどのように考えるなら、ぼくの中では高杉晋作の言葉がそれにあたる。

「面白きこともなき世を面白く」

これは、高杉晋作が辞世の句として残したものである。晋作は、自分の手で時代を切り開き、変えようとした素晴らしい人だ。世の中には、面白いことが無いかもしれないが、心のもちようで面白く感じることをできるといふことを伝えたかったのだと思う。もしかすると、自分が生きてきた中で教訓だったのかもしれない。

ぼくはこの言葉にとても共感した。晋作が言う通り、世界の見え方は、自分の心がどうあるかで大きく変化すると思う。嫌な気持ちで物事をすれば、やること全てが嫌になってくる。逆に、楽しい気持ちで物事をすれば、笑顔になれる。だから、つまらない世界であっても、心を一転させれば、面白く感じられるということである。面白い、楽しいといった感情は、人にとって非常に大切だと思う。なぜなら、そのようなプラスの感情は、次へのチャレンジ精神をかき立てる。チャレンジは、自分の成長に最も深く関わるといつても良いだろう。それほど重要なチャレンジという行動を起こさせてくれるのは、感情、つまり心なのだ。

ぼくは、小学生のとき、学校生活があまり面白く感じられなかったときがあった。何かが悪かったというわけではないと思う。なんとなく、雰囲気や、やることに対して嫌気が差していた。

そんな時に出会ったのが、この言葉である。その時、ぼくははつとした。今まで影にかくれて見えなかったものに気がついたようだった。ぼくはその時から、「学校嫌だな」という気持ちから、「どうしたら面白いかな」という気持ちに切り替えることにした。特に、あまり好きではない授業のときなどは、そのような気持ちでいることは容易ではなかった。しかし、嫌なこととはなるべく考えないようにし、面白さを見いだそうという意識をもった。

六年生のときには、「面白きこともなき世を面白く」するべく、児童会長に立候補した。自分が中心となって活動すること、新しいことも見えてくると思った。その時の児童会では、あいさつに力を入れていたのだが、あいさつであふれる学校にするために、たくさんチャレンジができた。その活動を通してみんなと協力することの大切さや楽しさが分かった。そして、企画が成功したときには、達成感を味わうことができた。

このように、高杉晋作の言葉を知ってからの自分の中の変化は、とても大きなものだった。今でも、この言葉を忘れずに、中学校という全く新しい環境での生活を楽しんでいる。毎日の生活を楽しむには、自分なりに楽しさを見つけ出すことがいちばんだと思う。人それぞれに思うことは違うので、何が好きで、何を面白く感じるかも、また違ってくる。だから、自分に合った最高の空間を自分で創り上げるのが大切なのだと思う。また、自分が好きなものにも、何かポイントがあるから好きになれるのだと思う。例えばロックが好きなのは、このリフが良いということや、この歌い方が良いといったポイントがあるだろう。だから、自分でこのポイントを見つけ出せば、より一層生活が面白いものになるのではないだろうか。

ぼくはこれからも、晋作の言葉を胸に刻み面白みのある世の中をつくる心もち続けたい。晋作

は、この心をもっていたからこそ、たくさんの大きな仕事を成し遂げられたのだと思う。だから、小学生のときの児童会長の経験を生かし、自分の心で面白い世界に変えるんだと、プラスの方向に考えていきたい。現在のコロナウイルスの問題に対しても、この考え方は必要だと思う。外出自粛や、イベントの中止・規模縮小などにより、決して面白いとはいえない状況である。その中で、どう楽しむかは、やはり自分次第だろう。晋作の言葉をもとに、考え、それに伴う行動をして、有意義で充実した生活を送ろうと思う。